

小学校美術教育の方法と技術に関する実践研究Ⅱ

－ 小中連携教育の意義と課題 －

Practical Research of Methods and Techniques of Elementary School Art Education Ⅱ

－ Significance and Problems of elementary and junior high education cooperation －

奈良学園大学 人間教育学部

松井 典夫

MATUI Norio

Nara-Gakuen University

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：小中連携，小中合同授業，授業観，中一ギャップ

Abstract : The role of education in the compulsory education phase of the junior high and elementary school is one in which lay the foundation in terms of human education. Attempts from its importance, school educational activities in mind the cooperation of junior high school and elementary school, to understand both, to practice the education hand in hand together have been made many. In this paper, from specific efforts in Osaka Kyoiku University Ikeda district Joint Study Group, and considered the significance and challenges of small and medium cooperation.

Is the significance of the elementary, middle and cooperation, in elementary school that made the practice, secular observation academic achievement of junior high school and later, state of life, such as the reality of bullying is necessary and the school year it is not the grade that made the elementary, middle and cooperation empirical studies of the effects of a method aspect of elementary and secondary education cooperation is required and comparative study, of, to a wide variety. In the future, promoting the cooperation with partner schools, we must further promote the study of elementary and secondary education cooperation.

Keyword : "Elementary and Junior high education cooperation", "Joint class of elementary school and Junior high school", "The idea for the class", "The problem of Junior high school freshman"

1. はじめに

1) 小中連携教育の背景

小学校と中学校の義務教育期における教育の役割は、人間教育の観点での土台を築くものである。その重要性から、学校教育活動は小学校と中学校の連携を念頭に置き、共に理解し、共に手を携えた教育を実践する試みが多くなされている。また、小学校から中学校へ

の進学において、いわゆる「中1ギャップ」と呼称される問題が浮上して久しい。これは、新しい教育環境になじめず、不登校やいじめなど、生徒指導上の諸問題につながっていく事態を指す*¹。いじめや不登校の原因を、「中1ギャップ」であると片づけてしまうことに、科学的根拠やデータは見られないが、現場で実際に児童生徒と接する教員たちの事態把握から発生、派生した一つの大きな問題であることには違いない。そ

の「中1ギャップ」に対する一つの方策として、小中連携・一貫教育の必要性が叫ばれ始めたのである。その小中連携教育の目的は、地域や学校の特性などによって変わるため、全国的に見ると多様である。例としては、

少子化の進行や地域コミュニティの弱体化、核家族化の進行により児童生徒の人間関係が固定化しやすい中、小中連携、一貫教育の実施により、児童生徒が多様な教職員、児童生徒と関わる機会を増やすことで、小学生の中学校進学に対する不安感を軽減することを目的としている例がある。また、中学生が小学生との触れ合いを通じ、上級生である自らに自覚的となることで自尊感情を高め、生徒の暴力行為や不登校、いじめの解消につなげていくことを目的としている例もある^{*2}。

例に示したように、小中連携教育の目的は多様であるが、その方法としては小中学校のそれぞれの学習指導要領により、系統だった教育の指針が示されている。その趣旨を生かしながら、義務教育9年間を見据えた系統的な指導の工夫を図ることが求められている。

2) 小中連携教育の問題点

文部科学省が平成23年10月に発表した、「小学校と中学校との連携についての実態調査(結果)」によると、「1-(14)小・中連携の取組の成果」として、「成果が認められる」と回答した学校は1013校(96%)であり、「成果が認められない」と回答した学校は37校(4%)であった。「成果があった」のその内容は、最も多かったのが「生徒指導上の成果があった」の74%であり、次いで多かったのが「学習指導上の成果があった」の58%であった。この結果だけ見ると、小中連携教育は価値の高いものであり、ますます推進されるものであり、積極的に取り組む学校も増加するだろう。しかし一方で、「1-(15)小・中連携の取組の課題」を見ると、「課題が認められる」と回答した学校は917校(87%)であり、「課題が認められない」と回答した学校は133校(13%)であった。その内容は、「小中の教職員間での打ち合わせ時間の確保が困難」が最も多く(75%)、他を圧倒する多さであった。ここに小中連携教育の大きな問題点が見られる。最も大きな課題は、「小中の教職員間」なのである。ここには、「打ち合わせ時間の確保が困難」とあるが、その文言に、

小中学校の教員間にある時間的、文化的隔たりが見られるのである。

本稿では、大阪教育大学附属池田地区合同研究会における具体的な取り組みから、小中連携の課題と意義について考察した。

2. 実践例

1) 実践の背景

本研究で取り上げる実践は、大阪教育大学附属池田地区小中校合同研究会における、中学校美術と小学校図画工作科の連携(共同授業)の取り組みである。題材名は「アート×カフェ」であり、小学校の一室に(この取り組みでは、附属池田小学校のランチルームを使用。当ランチルームは、当校の1階にあり、およそ60㎡の部屋である。)小学生と中学生の作品を展示し、机やテーブルなどを配置し、互いの作品を鑑賞しながら小中学生が語り合うことをコンセプトにした取り組みであった。

本実践を推進していくにあたり、当研究会の総論の中で、各教科の「知」について提案した。図画工作・美術部会としては、図画工作・美術科における「知」を、感性(非言語的知覚処理)・直観的表現・価値の認識・価値の表現・責任ある創造・文化の形成・アイデンティティーの確立であるとした。

「知」の設定の背景・理由として、まず個の価値と社会の価値の関わりについて注目した。

感性によって働き出す心情を表出したいという欲求は、個人に唯一の自己である意識を芽生えさせる。外界に対して行う個の認識の具現化は、あらゆる素材や方法の形を借りて行われる。その課程を表現と称し、アイデンティティーの確立には、表現の決定が伴う。感性は対象を知覚し、直観的に受容する力であり、個人は表出したい心の働きがより純粹に近い形で表れるほど、充実感を得て、真実に近い感覚を持つことができる。

したがって、図画工作・美術科が担う非言語的、総合的な表現方法は、個人の根本的な心の働きを自覚させ、豊かにし、現実味を与える機能をもつ。

ただし、アイデンティティーの確立は、個人による表現の獲得だけでは成立しない。変動する社会に対する責任ある創造を目指すことによって、初めて達成さ

れる。近年、インターネットによって個人の表現の公開は増加し、時間や距離などの物理的な制約を解消する手段が形成された。自己を表明したい人間の欲求は情報として発信され、容易に検索可能である。ネットワークの進化が、個人の自我を増長させ、ともすれば自己完結に陥らせる危険性がある。自我の主張を機械的に行うことが可能な条件下において、表現物を通して人と関わり、社会と価値を交換することに責任を持つ術の獲得が求められる。

価値観について脳科学者であるスペリーは、「価値観は、普通に認識される個人的、宗教的、哲学的観点からの意義に加えて、すべての人間の意志決定における普遍的決定因子として客観的に眺めることができる。」「山積する不利な世界状況を救うための有効な作戦計略は、環境条件の変化に対応して人間の価値観が変わるのを待っているのではなく、前もって直接に社会的価値の優先順位を追究することである。*³」と述べている。また、社会の課題に対し、どんな方向づけができるのか、解決に向けどんな選択肢を挙げられるかを決定づけるものは、各個人に存在する「価値観因子」であり、その調節的制御の役割がますます強力となる点について触れている。

この考え方は、感覚の喪失や意思決定から逃れる態度、無気力状態などの、社会と関わることに消極的な子どもの課題を浮き上がらせている。

アイデンティティーを決定づける個の価値観の多様性が、社会的価値に対してどのように調整され、作用されていくのが、社会形成に大きな影響を与える中で、ますます個の価値の自覚が求められる。

図画工作・美術科は、直観的な表現方法を子ども達に獲得させていく役割を担う。子ども達は体得した方法を活用し、自己の価値を見出す。そして、社会のあらゆる価値に向き合う中で、子ども達自身が充実感を得られる表現を選択し、それを決定する己の価値観について自覚する機会を与えたい。そこから、社会的価値を伴うアイデンティティーの確立を目指すのである。

次に、鑑賞教育から文化理解への社会的、思想的背景から、本実践「アート×カフェ」との関連について述べたい。

個の価値は社会と作用しながら、さらに複雑になる。理想や夢を形に表す活動が、他者との関わりの中で、さらに広げられ、集団の価値へと変化する。集団志向

は文化として多様化し、社会を形成する。文化の多様性に関するユネスコ世界宣言*⁴において「文化とは、特定の社会または社会集団に特有の、精神的、物質的、知的、感情的特徴をあわせたものであり、また、文化とは、芸術・文学だけではなく、生活様式、共生の方法、価値観、伝統及び信仰も含むものであること」とある。文化の形成には、情報を伝達するメディアが深く関わっている。

文化人類学者である青木保は、文化の多様性と対立するものは「グローバル化による一元化・画一化」であり、「それによって生じる、人間と社会の個性の喪失、創造性の抑圧、個人の埋没」を防ぐ必要があると課題視している*⁵。欧米化による世界の各システムの一様化が、少数民族間との衝突や少数派の文化の喪失を招くことについて言及している。これらの文化形成の現実に対し、子ども達の価値の多様性を充実し、活用し、交換できる機会として、鑑賞教育が挙げられる。

小学校図画工作において、子ども達は感性の表出への欲求が高く、情動が大きく影響する。表現の活用に対して非言語的、複線的な思考が強く発揮されるため、個人内で自分を客観視することが困難な状況下にある。そこで、改めて自分の活動や作品の様子、表現方法の決定力について、他者から客観的に指摘を受けることに大きな意義が生まれる。小学校の鑑賞教育は、特に身近な他者の価値を交換する機会であり、そこから文化の多様性へ関心が芽生える段階である。

中学校美術においては、知識の増加に伴い、言語的に対象を捉える傾向になり、客観的な自分について見直す時間が増える。情動的よりも理知的に対象を表す方法に興味関心が高まり、表現の決定が、社会的な価値に関連することに意義を見出す。中学校の鑑賞教育は、自分が理想とする社会像や多文化共生の実現を目的として、自分の価値観を決定できる段階である。

鑑賞教育の中で子ども達が、個の価値と社会の価値の接点を発見し、文化の在り方に対して主体的に思考する態度を育むことができるように、図画工作・美術部においてカリキュラムを検討する。そして、鑑賞教育の授業実践の中で、小学校中学校の価値の共通因子の比較と、成長段階を観察したい。

また、文化のグローバル化の問題も鑑み、あくまでも個の価値が見失われないように、交流される集団の価値が同質で一様化しないように配慮していく必要が

ある。

本実践の骨子であるカフェは、思想や概念を交流し、新たな社会的な価値を発生させる装置であることに着想を得て提案する。本実践「アート×カフェ」においては、鑑賞教育の側面を強化させ、子ども達が外界と価値を交換し、多文化理解の態度を育める機会をつくることを目的とした。

2) 実践の概要

本実践の対象は、第6学年と中学校2年生である。まず、単元設定の理由から述べたい。

昨今の情報化社会において、個々が何らかの事象、事物に抱く価値は、その価値を検証し、高める場もなく、自己完結に陥る可能性が高い。そのことは、児童の社会性、生きる力を育む必要性を痛感させるのである。そこで、鑑賞教育を重点においた本題材において、鑑賞力を「価値の認識力」と捉える。作品に対して個々が抱く価値は様々であるが、その価値を認識し、その価値は個々に違うということの気づきは、美術教育を通じた児童の社会性の高まりを育むのに肝要である。そこで、個々の価値を高め、再認識する方法として「価値の交換」場面である「アート×カフェ」を設定する。様々な作品が並び、個々に価値を見出すことができ、その価値を交換しあう場としてのカフェの機能を活用した鑑賞教育を行う。

自ら内面に抱いた価値を他者に対してアウトプットすることによって、自ら抱いた価値を認識し、高めることができる方法として、ギャラリートークを取り入れる。内面に表出したものを言語化し、他者に伝わるように表現することは容易ではない。そこで本題材では、児童は京都国立近代美術館において、学芸員によるギャラリートークを体験した。そこで体験したギャラリートークの手法、言葉の紡ぎ方、伝え方を参考にし、自ら抱いた価値を表現することによって、個々に抱く価値の高まりを期待した実践である。

公開授業においては、小中学生の合同授業を行った。小中学生の作品が並ぶアート×カフェの場において、その作品の完成度の違いや抱く価値の違い、ギャラリートークの方法や伝え方、伝わり方の違いは、小学生にとっては次年度の中学生としての学びにつながっていくであろう。その合同の場における学びは、鑑賞力とそこからつながる技能や発想力において、図画工作科

から美術科への架け橋となる。

指導計画は以下のように設定した。

第1次 アート×カフェについて（1時間）

ここでは、世界の様々な形態のカフェを画像で児童に紹介し、アートがカフェという場に設定されていることの可能性の認識を、児童の中に体験として取り込む活動を行った。中学校は、夏休みの課題として、カフェを体験させ、行ったカフェの紹介文を作らせていた。

第2次 美術館で鑑賞活動を体験しよう（2時間）

ここでは、小中学生が別日にそれぞれ美術館（京都国立近代美術館）において、ギャラリートークを体験した。ギャラリートークとは、作品について、鑑賞者に対する働きかけを工夫した対話型鑑賞方法の総称であり、今回は京都国立近代美術館の学芸員が、児童生徒にギャラリートークを行った。作品についてどのように語るのか、あるいは、どのような手法で鑑賞者の、作品に対する関心を高めるのかを、児童生徒に体験させることが目的だった。

第3次 アート×カフェを作ろう（2時間）

ここでは、児童生徒がそれぞれ、アート×カフェの場作りを想定しながら、作品作りを行った。作品を置きたい場所、光の具合、材料や用具も自分たちで考えさせた。個人作品も可だが、グループでもよいこととした。一方、中学校は全ての生徒が同じ材料を同じ分量で使い（特殊粘土）、必要に応じて針金などを用いて作品を作った。

小学校の場合、作品に対する思いや期待感、可能性が増幅していき、2時間では不足、時間を都合して作品作りを行った。

第4次 アート×カフェをひらこう（2時間）

この第4次が、小中合同の授業であり、実質的に2時間のうちの最初の1時間は準備にあて、後半の1時間が公開授業の場で行われた。この本時の指導案^{*6}や授業の様子、参会者の言葉などを、小中を比較検討しながら考察した内容を、次項3で記す。

3. 小中合同授業の実際と分析

1) 指導案について

合同授業における本時の目標は、小学校は「自ら選択した作品に対して感じた良さを、ギャラリートークを行うことによって他者に伝え、その価値を認識し、

高めることができる。」というものであり、中学校は「・表現活動に有効な意見を発見し、その意識の高まりを自覚する。・美術を通して社会に働きかけることに価値意識を持つ。」というものであった。これらを比較したとき、小学校は「自己」への気づきや「内面」の成長を意識した、あくまでも内界を舞台とした目標であるのに対し、中学校は「社会」とのつながりを意識した、外界を舞台にした目標設定であることがわかる。このことは、同じ題材で授業を行う上で、小学生と中学生の学力の違いを意識した、目標設定であると言えるだろう。

次に本時の展開だが、別添の展開案を参考にさせていただきたい。なお、本稿では展開を中心にした考察を行うため、評価の観点については割愛している。

書き様は小中それぞれであるが、合同授業であるため、展開内容は同様のはずである。ここで小中を比較検討するとすれば、「指導上の留意点」にあたる部分であろう。一つの展開に対し、小中それぞれの授業者が、どのような留意点を持ち、いかなるねらいを持ってその活動を見たり、指導したりするかについては、検討する価値がある。まず展開1「作品を選ぶ」段階だが、小学校は、自分が選択する作品と、ギャラリートークが結びつくものであるという意識を持たせることに留意している。これは、ともすれば仲の良い友達の作品を選んだり、単なる好みで選んでしまいがちな、小学生の実態を考慮した留意である。一方で中学校は、ギャラリートークを行う前提で、そのトークの趣旨として、外観説明ではなく、「感覚や感動」を伝える意識を持たせることに留意している。「感覚や感動」を短いキーワードにすることは、小学生にとっては困難であり（感嘆語のみになる可能性が高い）、中学生の実態からくる高度な要求と言えるだろう。

次に展開2は、「ギャラリートーク①を行う」である。小学校の留意点は、「良さが伝わったかをギャラリーに聞き、また、ギャラリーからの言葉をもとに、自らが抱いた良さを考え直し、再構築するきっかけとさせる。」となっている。これは、最初に抱いた作品の「良さ」が、他者の見解を聞くことによってさらに違った視点や広がりを持つことを期待しているものであり、小学校学習指導要領における、第2章各学年の目標及び内容〔第5学年及び第6学年〕2内容B鑑賞(1)イ感じたことや思ったことを話したり、友人と話し合ったり

するなどして、表し方の変化、表現の意図や特徴などをとらえること^{*7}という内容を意識したものである。一方で中学校の留意点は、「自分の感じ方が他者に伝わる中で、作品が新しい見え方をすることを意識させる。」とある。文言は違うが、「作品の見え方を変容させる」という意味では、この活動については小中ともに、授業者は同様のことを意識していたと考えられる。

展開3は、「ギャラリートーク②を行う。」である。これは、ギャラリートーク①を通して、さらに発展した内容でギャラリートークを行うことを目的とした活動であり、小中ともに大きな留意点の違いはない。

最後の展開4は、「カードを作品のところに貼りに行き、全員で作品とカードを鑑賞する。」というふりかえりの場面である。小学校の留意点は、「カードと作品を全員で鑑賞することにより、制作者・トーク者・ギャラリーと、あらゆる立場で振り返りができるようにし、今後の学びにつなげていくことができるようにする。」というものである。ここでは、「あらゆる立場」ということがキーワードになっている。話したり聞いたりする、各々の立場で書かれたカードを鑑賞することにより、さらに視野の広がりや、作品に対する「美」の感じ方の広がりや期待するものであり、これもまた、「内界」の成長や広がりや意識したものである。一方で中学校は、「自分たちの表現がカフェの空間を仕上げていくことに注目させる。」とあるように、ふりかえりのカードもまた、カフェという「場」を作るものであり、その空間を意識させることを望んでいる。ここにもまた、小中の学びの違い、「内界」と「外界」への意識の違いが見られるのである。

小学校「本時の展開」^{*8}

学習活動及び内容	指導上の留意点○ 評価の観点●
1. 場の設定と本時の趣旨を知る。 ○趣旨説明を聞く。 ○アート×カフェを見て回り、お気に入りを決める。 2. ギャラリートーク①を行う。 ○伝えたい内容をカードに記入する。	○「好きな」作品を選ぶ際、その作品をもとにギャラリートークを行うということを意識させる。 ○「きれい」等の主観的な観念ではなく、その良さが伝わるように工夫して書かせる。 ○極端に人数が少ないところが出ないように

<p>○選んだ作品のところに 行き、ギャラリートーク を行う。</p> <p>3. ギャラリートーク② を行う。</p> <p>○ギャラリーと話し合 う。</p> <p>○カードに記入する。</p> <p>○ギャラリートーク②を 行う。</p> <p>4. ふりかえり</p> <p>○カードを作品のところ に貼りに行く。</p> <p>○全員で作品とカードを 鑑賞する。</p>	<p>配慮する。</p> <p>○良さが伝わったかを ギャラリーに聞き、また、 ギャラリーからの言葉を もとに、自らが抱いた良 さを考え直し、再構築す るきっかけとさせる。</p> <p>○ギャラリー役の児童に は、①とは違うところ に行くよう伝える。</p> <p>○カードと作品を全員で 鑑賞することにより、制 作者・トーク者・ギャラ リーと、あらゆる立場で 振り返りができるように し、今後の学びにつなげ ていくことができるよう にする。</p>
--	--

<p>ドに追加記録する。</p> <p>・自分の視点や他者の視 点が変わることによって 見つけられたことを伝え る。</p> <p>【新しい価値を表す活動】</p> <p>・カードを作品のところ に貼りに行く。</p> <p>【価値の変容を見る活動】</p> <p>・展示された作品やカー ドを鑑賞する。</p>	<p>る。</p> <p>・人々が集まる場が生み 出す見え方であることを 再認識させる。</p> <p>・自分たちの表現がカ フェの空間を仕上げてい くことに注目させる。</p>
--	---

中学校「本時の展開」※9

学習活動及び内容	指導上の留意点○ 評価の観点●
<p>【自分の価値を表す活動】</p> <p>○作品を選ぶ。</p> <p>・カフェの中にある作品 の中で、自分が注目した い作品を選択する。</p> <p>・作品についてのキー ワードをカードに記入す る。</p> <p>○カフェ空間に主体的 に関わる。</p> <p>・集団が過ごしやすい空 間づくりに参加する。</p> <p>○ギャラリートーク①を 行う。</p> <p>【他者の価値に気付く活 動】</p> <p>○ギャラリートーク②を 行う。</p> <p>・他者のコメントで気 に入ったものがあればカー</p>	<p>・心惹かれたポイントを、 作品の外観説明にとらわ れないで、自分の感覚や 感動からキーワードを導 くように再確認する。</p> <p>・多くの人々と関わりな がら場を作る行動に変化 しているかを観察する。</p> <p>・自分の感じ方が他者に 伝わる中で、作品が新し い見え方をすることを意 識させる。</p> <p>・価値観を押し付けるも のではなく、否定するも のでもない視点を持たせ</p>

2) 授業について

これまで、指導案の文面に着目して小中の比較を行って見たが、実際の授業ではどうだったであろう。そこには、授業という、瞬時に流れ、瞬時に方向を変え、生き物のように動き続けるからこそ生まれ得た、小中の注目すべき比較材料があったのである。

もっとも大きかった違いについて述べたい。それは、実際に授業を合同で行うことによってこそ生じた、小学校教諭と中学校教諭の「授業観」の違いである。一般的に、という用語弊があるかもしれないが、小学校の教諭の授業観としては、できる限り児童が主体的に考え、思考する授業をよしとする傾向があるため、教師が「しゃべりすぎる」授業はよくないという感覚がある。この授業観の是非については他の研究に委ねるとして、個々ではその議論は行わず、あくまでも一般論として捉えていただきたい。その一方で、中学校教諭の授業は、シナリオを大切に作る授業と言ってもいい。綿密に流れを作り、その流れが変わることを嫌う部分がある。それだけに、話し続ける技量と、教材の秀逸さが勝負である面がある。そこに、小中の教師間に、授業観における齟齬が生じる。小学校の教諭は中学校の教諭の授業を見て、教師主導の教授型だと感じ、中学校の教諭は小学校の教諭の授業を見て、学びや得るべき事柄の達成度の低さを感じるのである。

本実践の合同授業では、中学生が小学生を導く形をとり、また、公開授業であるという意識も手伝い、中学校教諭の提案する授業スタイルをとった。そこには、綿密に計画されたシナリオが準備されていた。授業はシナリオ通りに進んだが、最後に小学校教諭として、「物足りなさ」を感じていた。そこで、授業の感想を小中学生に交互に聞き、その感想を全体で共有しながら、中学生はこう感じ、小学生はこのように感じるんだという、その違いを全体で共通認識する場面を作った。これはシナリオにはなかった場面だったが、参会者の中からは、「あの場面でやっと、授業らしく感じた」という声も上がった。

どちらの授業観がいいというのではない。そもそも、異年齢の異空間で育つ小中学生に対する授業方法や授業観は、違って当たり前なのだ実感したのである。昨今、小中連携教育の一つの手法として、「乗り入れ授業」がある。中1プロブレムに対応する手法として、予め中学校の授業を体験し、中学校の先生に慣れておくという意味では効果があろう。しかし、授業観の違いの気づきは、小中間の教師同士の無知を実感せざるをえなかった。その無知を埋めることが、出前授業の一步前にあるべきではないかと、小中合同授業から感じさせられたのである。

4. 小中連携教育の意義と課題

冒頭に、小中連携教育の目的として掲げられている資料として、「少子化の進行や地域コミュニティの弱体化、核家族化の進行により児童生徒の人間関係が固定化しやすい中、小中連携、一貫教育の実施により、児童生徒が多様な教職員、児童生徒と関わる機会を増やすことで、小学生の中学校進学に対する不安感を軽減することを目的としている例がある。また、中学生が小学生との触れ合いを通じ、上級生である自らに自覚的となることで自尊感情を高め、生徒の暴力行為や不登校、いじめの解消につなげていくことを目的としている例もある。」と記した。このことを鑑みると、附属池田小中学校が、公立一般校と比較して、ある意味特殊な環境や状況にある学校園であるとはいえ、その目的に差異は感じられない。言わば、附属学校園が抱える小中連携の必要性における条件は、公立一般校と同様に存在するのである。そのことを前提に、実践から

生じ、感じた小中連携教育の意義と課題について整理したい。

まず課題についてである。実践を進めながら、小中間で最初に向き合わなければならなかった壁は、実践対象の学年、クラスであった。実践当時の環境として、小学校の教諭は他学年の担任をしながら、第6学年（3クラス）の図画工作科の授業を担当していた。これは、4月当初は図画工作科の専任をしていたが、第2学期にある学年の担任が産休に入ったため、当該教諭が担任代行を務めるようになったためである。中学校教諭は、第2学年のクラス担任と、美術科教諭を兼任していた。中学校は教科担任制を敷いているため、中学校教諭は全学年の美術を担当していた。これが実践当時の環境である。

そこで、小学校教諭は第6学年の3クラスとも、本実践に取り組みさせる必要があった。研究のためという名目で、1クラスだけ本実践を行う可能性も模索したが、経費の問題、平等な学習体験の問題、そして、予想される、小学生ならではの心理的な問題が生じた。経費の問題としては、小学校の授業に必要な経費は毎月徴収する「学年費」というもので賄われる。これは、すべての児童が平等に還元されることが前提の経費であり、1クラスだけ、アート×カフェの実践で特別な経費、金額を使うことはできない。この概念、通例は、「平等な学習体験」にも通ずる。「予想される、小学生ならではの心理的な問題」とは、アート×カフェを体験できないクラスの児童が、羨み、失望することが予想されたのである。これは、公教育としての小学校の役割として好ましいものではない。ましてや多感な第6学年の児童が、そのような感覚を持った時、他の要素に悪影響を及ぼす可能性もあるのである。一方で中学校は、担任する1クラスだけの実践を選択した。これは、中学生であるという学齢もあるが、逆に、他のクラスの時間やカリキュラムを変更することが、容易ではないという背景があった。したがって、本実践は、小学生120名、中学生40名という、ある種不均衡なバランスの人数で取り組まざるを得なかったのである。

次に、時間割の編成の問題に幾度もぶつかった。この場合、小学校は幾分融通が利いた。研究会が実際に迫ると、どうしても時間が必要になってくる。この時、担任に一声かけ、時間割を調整してもらうことは可能であった。しかし、中学校はそうはいかず、教科担任

制のため、美術に時間が必要だから数学の時間を1時間ほしいということは、困難だったのである。したがって、小中合同授業とは言いながらも、合同で顔を合わせて取り組むことができたのは、研究会当日の公開授業も含めて3時間ほどであった。

これらの課題は決して特殊なものではない。「小学校と中学校との連携についての実態調査(結果)1-(15)小・中連携の取組の課題」によると、「課題が認められる」と回答した917校(87%)のうち、「小中の教職員間での打ち合わせ時間の確保が困難」の回答が75%であり、次いで多いのが、「時間割の編成が困難」の34%である。このことは、小中連携教育に携わった多くの学校が、同様の課題を示しているということでもあり、そのことは、課題を解決する糸口も明確であるということではなからうか。

次に、小中連携教育の意義について述べたい。ここでは、本実践に基づいて、小中学生にとっての意義と、教師、あるいは学校社会にとっての意義に分けて述べていく。

まず小中学生にとっての小中連携教育の意義についてだが、本実践では、中学生のリーダーシップが大いに発揮されていた。附属池田中学校の生徒は、およそ三分の二が附属池田小学校からの内部入学であり、中学生にとっては小学生に、成長した姿を見せたいという思いが働くのかもしれない。このことは、同じ地域内の小学校から進学した、一般公立校の中学生にとっても当てはまる、有効に活用すべき心理的側面であろう。また、小学生にとっては1年後、2年後の自分たちの姿として中学生を見ることにより、今の自分に足りないもの、成長させるべきものを実感し、残りの小学校生活に大きな変化をもたらすだろう。このことは、小中学生が共に行動し、考え、協同したからこそその結果であり、授業参観交流などでは期待できない効果ではないだろうか。その点で、小中学生が合同で一つの実践に取り組むことは、意義のある、また、小中連携教育の目的を達成する一つの有効な方法であることを証明したと言える。

次に、教師、あるいは学校社会にとっての意義について述べる。本実践は、先にも述べたように、小中合同の研究会に向けて行われたもので、図画工作・美術科のみならず、算数・数学、社会科など、すべての教科において小中(高)連携の取り組みがされた。年度

当初に各教科で顔合わせが行われたが、その時、研究会の組織の会長を務めた小学校の校長のあいさつで、印象深く、また核心をついた言葉があった。

小中校の教師は、本学(大阪教育大学附属学校園)の場合、同じキャンパスにいながら交流がない。それでいながら、互いの校種を批判的に言う。例えば小学校の教師は中学校の教師の授業を、しゃべりすぎで教授型だから、子供に主体性がない、など。しかしそれは、良く知らずに言っていて、互いに印象だけでしか見ることができていない。小中高連携で、まず私たちがしなければならないことは、「互いをよく知ること」である。

聞いていた小中高の教師は、誰もが核心を突かれた思いがしたのである。学校現場は多忙である。小中の教師が打ち合わせの時間を取りづらいという課題を、多くの小中連携教育実践者が訴えていることは、先に述べた通りである。しかし、まずはお互いの授業を見合ったり、授業観について話したりするなど、校種の違いを明確に互いが認識するところから始めたい。その時間の確保も含めて、小中連携教育活動として、計画、予算の執行も行うべきである。

小中連携の意義とは、その実践を行った小学生の、中学校以降の学力、生活の様子、いじめの実態などの経年観察が必要であり、また、小中連携を行った学年とそうでない学年の比較研究、そして小中連携教育の方法面での効果の実証研究が必要であり、多岐にわたる。今後においては、協力校との連携を進め、小中連携教育の研究をさらに進めていきたい。

引用文献

- ※ 1 「小中連携，一貫教育の推進について」
文部科学省
- ※ 2 同上
- ※ 3 ロジャー・ウォルコット・スペリー（1985）
「融合する心と脳 科学とモラルの優先順位」
誠信書房，pp171-172
- ※ 4 ユネスコ総会「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」，2001
- ※ 5 青木保（2003）「多文化世界」岩波新書，
pp.26-27
- ※ 6 平成 25 年度 大阪教育大学池田地区附属
学校研究発表会 発表資料 pp.75-81
- ※ 7 文部科学省 小学校学習指導要領
第 2 章 各教科 第 7 節 図画工作
- ※ 8 平成 25 年度 大阪教育大学池田地区附属
学校研究発表会 発表資料 p79
- ※ 9 平成 25 年度 大阪教育大学池田地区附属
学校研究発表会 発表資料 p81